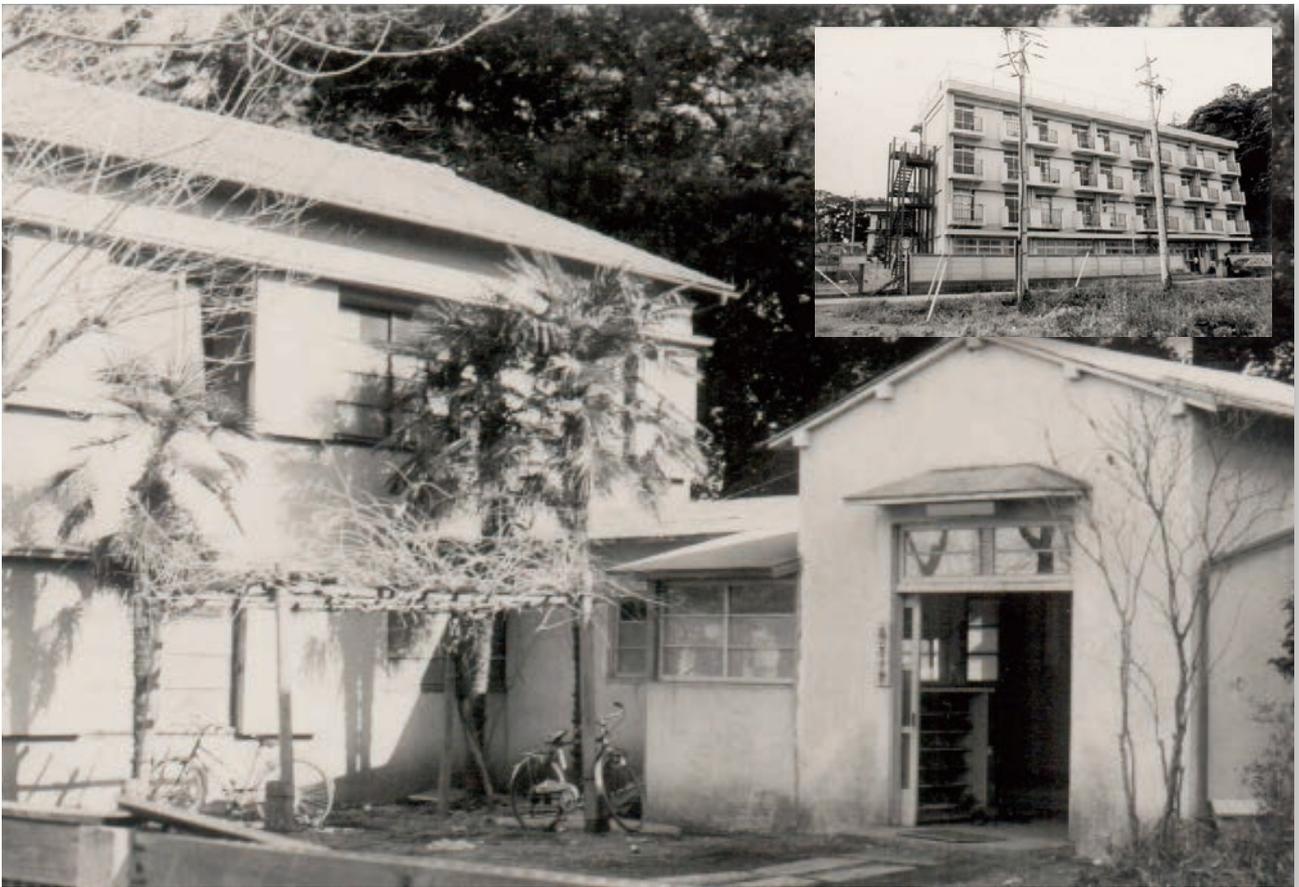


CONTENTS

- 学生寮の設置 1
- 学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち X 2
- 令和元年度淑徳大学アーカイブズ特別展
「祈りのすがた—交流する生者と死者—」開催 5
- 「淑徳大学アーカイブズ10年の写真展」開催 6
- 淑徳大学アーカイブズ日誌（2019年6月～11月） 6
- 「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内 8



— 学生寮の設置 —

草創期の学生は地方出身者が多く、学生寮が不可欠であった。開学時の「学則」にも「本学に学寮を付設する。」とあったが、その整備は容易なものではなかった。第一男子寮（写真）はもともと大巖寺の所有物で、住宅不足の当時川崎製鉄の下請け会社の社員寮に使用していたもので、その後まもなく雄飛寮ができた。一方女子寮は、学祖が地域活動の拠点として建てた隣保館を改造した施設から始まり、翌年大巖寺境内に建つ研修館を転用した大慶寮が加わり、本格的な寮舎「若樹寮」（写真右上）は1968年に竣工した。寮生たちは大学の行事や活動に大きな役割を果たした。

（淑徳大学アーカイブズ所蔵）

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち X

— 三輪政一と中西雄洞 — (1)

淑徳大学アーカイブズ 所長

長谷川 匡俊

本号では、主として戦前期にあって、長谷川の社会事業界における盟友と目すべき二人の人物を取り上げてみよう。一人は四恩瓜生会の三輪政一（1879～1953）であり、もう一人は浄土宗労働共済会（以下「共済会」と略す）の中西雄洞（1889～1959）である。いつ頃の話であろうか定かではないが、この二人に長谷川を加えて、渡辺海旭門下における「社会事業の三羽鳥」と称されたという。三人が渡辺の愛すべき門下生であったことは、つぎの一事を以てしても明らかである。

渡辺が還暦を迎えた折のこと。門下生たちが中心となり、祝賀の会を催したいと渡辺に話を持って行った。ところが渡辺はその厚情に感謝しつつ、「何卒拙生の平素の信念主張を御酌取の上、拙生に関する祝賀の儀は一切御取止の程偏に懇願仕置候」と、その理由を含めて長文の書面を認め、私的な祝賀の取止めを求めている（1931（昭和6）年1月31日付）。実はその宛先が、長谷川・中西・三輪の三人なのである（『壺月全集』下巻、p595～596）。

渡辺には、多くの弟子や門下生がいるが、僧俗および出身校等はさまざまで、渡辺の豊かな学識と度量の大きさをうかがわせる。では、はじめに先輩格の三輪の生涯の概略を紹介し、長谷川との出会いと接点を見届けておこう。三輪は号を華城と言い、1879（明治12）年の生まれだから、長谷川より11歳も年長で社会経験も豊富である。1902年から10年まで韓国に住し、華城学校の校長も務めた。帰国した10（明治43）年から救貧慈善団体の財団法人・四恩瓜生会の経営に参画し、13（大正2）年には主任（理事）、やがて理事長・会長となる。同会には、施療部・講演部・少年部・夜学部・出版部等があって、特に施療部では小児患者が全患者の半数を占めるほどで、肺結核、胃腸病患者が多かった。出版部で月刊『精華』を発行していたことも知られている（仏教徒社会事業研究会編『仏教徒社会事業大観』1920年）。このほか三輪の活動は、次号で取り上げる昭和戦前期における私設社会事業連盟の結成と運営をはじめ、民間社会事業の組織化を牽引する一方、方面委員長としての活動、戦後の小石川区議会議員など多岐にわたっている。



三輪政一

（『社会福祉人名資料事典』第4巻、2003年、日本図書センター）

三輪と渡辺との出会いは、1899（明治32）年7月、渡辺や境野黄洋・高島米峯らによって結成された仏教信徒同志会が機関誌『新仏教』を発刊し、いわゆる新仏教運動が展開されてゆくなかでのことであろう。渡辺は運動が始まって間もない1900年4月に浄土宗第一期海外留学生としてドイツに向け出発し、10年後に帰国しているが、『新仏教』に投稿はしている。また三輪も韓国から帰国して間もない10年6月号を皮切りに、『新仏教』が廃刊となる15年まで、計9本の論文を発表していることから明らかである。二人の緊密な関係の舞台は東洋大学にもあったのではないと思われる。渡辺は帰国した1910年に宗教大学と東洋大学の教授に就任しており、一方の三輪も不明な点が多いながら、東洋大学に籍を置いていた時期があったとみられる。同大学創立者・井上円了の没後まもなく、東洋大学校友会から出版された『井上円了先生』（1919年）の編者は三輪であり、大正中期には同大学の「幹事」の役職にあって社会事業学科の新設にも関わった。20年3月に同大学得業、講師号を受ける。実質的には学長の境野黄洋に次ぐナンバー2の地位にあったという（佐藤厚「まぼろしの東洋大学朝鮮分校」『井上円了センター年報』23参照）。同大学の前身「哲学館」出身の境野が渡辺と「新仏教」で行動を共にしていたことを考慮すると、この三者間のつながりは比較的早くか

らあったものとみられよう。

また、12年5月、渡辺が中心となって仏教徒社会事業研究会が発足すると、2年後の14（大正3）年6月、第1回全国仏教徒社会事業大会が東京麹町丸の内の保険協会で開催された。その折、大会委員長は渡辺が務め、四恩瓜生会から出ていた三輪は10人の実行委員の一人に選ばれ、浄土宗労働共済会から出ている村瀬戒興らと共に常任委員として渡辺を助け、大会を成功に導いた。

この当時、長谷川は宗教大学本科2年に在学中であったが、渡辺の自坊西光寺で書生をしていただけに、大会の準備や運営に裏方として多少の関わりを持ったものと思われ、渡辺の紹介により三輪との交流が始まったとみても不思議ではない。この社会事業研究会の事務局は共済会に置かれ、渡辺の下で月例の研究会も開かれていたから、そうした機会に3人間の交流があったことは言うまでもない（『労働共済』参照）。後年のことだが、長谷川のマハヤナ学園設立の折には、「創立趣意書」に錚々たる「創立顧問」の一人として三輪政一も名を列ねている。尊敬すべき先輩であることに加えて、すでに斯界で名の通った人物であったことが知られよう。



『労働共済』第1巻第1号の表紙と裏表紙
（『労働共済』第1巻、2005年、不二出版）

つぎに中西は、号を紅城と言ひ、1889（明治22）年和歌山県に生れ、長谷川より1歳年上で、在家の出身だが縁あって浄土宗の僧となる。1913（大正2）年浄土宗第六・第七連合教校（現・上宮高校）を卒業して上京し、早稲田大学高等師範国漢科に入学。このとき渡辺を頼って西光寺に入り、渡辺が主宰する浄土宗労働共済会に宿泊し主任となった。長谷川の西光寺入寺はその前年本科1年のことだが、文字通り渡辺門下として両人は学生時代に出会っている。中西は翌14年、政治経済学科に転科、学生的身で共済会の経営を任された。16年3月卒業と同時に同会理事に就任。共済会を拠点とする中西の活発な活動は、彼を「発行兼編集人」とする機関誌『労働共済』

（15年1月創刊）等に詳しい。なかでも青年労働者の健全な修養機関としての「商工青年会」（16年）の結成をはじめ、深川商業学校（21年）、さらに仏教界における「内地最初の鮮人学校」（次号で取り上げる渡辺の言）と称された明照学園、共済会の託児所を母体とする明照保育園（31年）、その後身の月かげ幼稚園（37年）等を設立し、その経営に尽力している。

中西はまた、25年深川区議会議員、28（昭和3）年東京府議会議員、37年東京市議会議員を歴任し、41年東京府教育委員長、52年江東区教育委員会委員長を務め、議員の方は都制の実施にともない、東京市議会議員が解任されるまで続け、あえて国政ではなく、人々の暮らしや地域社会の発展に直結する地方政治に力を注いだ。このほか方面委員（民生委員）や保護司の活動にも貢献している。

* * *

さて、長谷川と上記二人との関係について、とりあげてみたいことがらは二つある。本号ではそのうちの一つ、青年期における社会事業の出発点のところに焦点を当ててみたい。長谷川が宗教大学を卒業して、東京市の養育院に就職し、想像を絶する激務のために倒れ、房総船形の養育院安房分院（結核療養所）に転地療養していた時、上記の盟友に宛てた手紙が残っているので（前掲『労働共済』および長谷川の自著『社会事業とは何ぞや』所収）、それらを手掛かりに話を進めてみよう。1916（大正5）年、長谷川25歳（満年齢）のことである。

手紙の宛先を見ると、中西宛の書簡には「紅城兄足下」と記されているのに対し、年齢・キャリア共に先輩の三輪宛てた方は「華城大兄貴下」と敬意を払っているのが分かる。はじめに、中西に宛てた手紙の一節を紹介しよう。

僅に一年が程、そも亦手痛き生活の惨苦に悩み、栄養不良や身心過労に骨を刻みつゝも猶も生の躍進とか報恩の涓滴とか事業の精神とか遠大なる理想とか卓抜なる識見とかをブランデーとして洗面作りつゝも破顔微笑し御腹は空いてもひもじうないと頑張る矛盾か撞着か虚偽か抑も亦現代病か。唯此の一轍は変ずべくもあらず。丈夫の意気、僧者の感、高唱謳歌以て快を遣る。今尚昨の如きも、勢ひ醸成する所肉落ち體頹る。廢残者流概ね此の類、紅城兄！抑も此の輩の共済処分はこれを奈何と為すべく候か。（『長谷川良信全集』第一巻p252）

理想に燃え、情熱を傾けて取り組み始めた実践現場からのリタイア、苦渋に満ちた内面の葛藤を率直に披瀝しているのは、相手が親友だからこそというべきであろう。

つぎは、社会事業関係職員の労務管理や劣悪な処遇に



中西雄洞—1926年撮影—
(淑徳大学所蔵)

関する長谷川の手厳しい批判と問題提起である。時代が異なるとはいえ、現今の働き方改革を想起させよう。

ひとり社会事業関係の職員先生に至りては日本国中大概依然として大馬鹿揃ひに居り、未だ毫も天下に訝しまれず。(中略)今の時に於て斯業職員優遇の道を講ぜずんば其の業危し。少くとも処遇の大策を立つべし。少くとも現在の職員虐待を廃むべし…紅城兄、此の言説何とか聞く。一時の偶語、又以て時弊に中るなきや。今日社会事業の風格、品位、真価の低下なる、事業の進展なき、これ職員^(の)の腰の落ち付かざるに職由す。(同上書p253)

以下は『労働共済』に掲載された「南総より」(16年2月23日付)からの一節である。

帝都を去って一百有余日、(中略)嘗て江東に在りし日、足下と親しく当世の事を語り、又暗に他日を期す、爾来碌々未だ一歳ならず。而して予や一跌如此し、私に慚ずる所、頃者、聞くが如く^(ん)ば、足下や学窓の余暇、盛に経論^(論)を遂げ、近く「商工青年会」の成を告げ大に宿昔の志を伸べんとすと、(中略)兄の勇奮如斯く内外に亘り、澁澂として彼此相率へ苟も余隙^(き)を遺き^(さ)るの概、予輩をして誠に意を強ふせしむ。乞ふ自重せよ。(第2巻第3号)

文中、「嘗て江東に在りし日」とは、渡辺門下として、深川西光寺で共に過ごし、将来を期して互いに語り明かした日々を指している。自分が療養の身であるのに対し、中西が年来の志を開花させ、「商工青年会」を設立するという朗報に、長谷川は我が事のように喜び讃えている。ところで、療養の身となれば、現場に立てぬ悔しさはもとより、先行きの不安や恐れとも付き合っていかなければならない。そのような境遇のなかで、長谷川の社会事業へのモチベーションを支えていた任務があった。つぎに紹介する手紙の内容から、長谷川の問題意識が那邊

にあったかを考えてみよう。

予は昨今養病の傍ら「仏教徒社会事業誌」の編纂に従ひつゝあり。朝夕点検する所、所謂志士仁人が各別各個、随縁機縁によりて創始せられたる一々の事業に其処に社会的に渾一的意義を見出さんとせば一種の矛盾を感じ来る。然し乍ら社会事業が徹頭徹尾個在ならば其の価値の一半は減じられざるを得ず。故に如何なる零細の事業と雖、彼れの地方的、はた国家的意義を表現するの要あるを見る。而も此点に対して日本の社会事業は従来あまりに無頓着なりしを感じ。庶幾くば足下の授産職業紹介、飲食物実費給与、簡易宿泊等当面の事業をして更らに延ひて下層労働者の教育となり、所謂「商工青年会」となり、小工場覚醒運動となり、厳然として其の存立を地方的国家的たらしめられん事を。(同上)

冒頭の「仏教社会事業誌」の編纂は、仏教徒社会事業研究会から長谷川が委嘱された仕事であった。後に『仏教徒社会事業大観』(1920年4月)として刊行されたが、研究会の名で出ているため、実質的な編集者が意外と知られていない(詳細は別稿)。闘病生活にあった若き日の長谷川の歴史に残る業績である。この編纂事業に従事しながら長谷川が着眼し、思考し、提起しているテーマは、仏教者の社会事業の個別性・特殊性から一般性・普遍性への架橋、あるいは個別事業の地方的ないし国家的な意義付けなど、現場の実践の上からも、社会事業史の視点からも、実に興味深い問題である。

* * *

一方、同時期に発信された三輪宛の手紙では、三輪の積極果敢な際立つ行動力に敬意を払いつつ、自らの療養の身に焦燥感を吐露している。

教界日々に多事、努力又努力、積年鬱結せる幾多の要務、今の時に於て有志断々乎勇奮快刀をやるべし。大兄等此の時更に国家天下の為^(自)自重を要す。飜而生は心ならずも生存税を一時に徴集せらるゝ事と相成、世にも意気地なき保養者など、落伍廢残の汚名の下にあたら有為の半歳を徒消し終りぬる儀に候。普天の下男兒と生れ何の面目かありて如此く悦予生を偷む事を為さん(中略)。とはいふものゝ時に又新聞を読み、雑誌を手にし、更に半夜孤灯の下短檠に倚り、一世の推移、社会の興廢を觀望し来れば、何とやらん年来の志業、今生の使命とも湧然として、胸に塞がりこうしても居られぬ様なかなかに静まりかぬる風情も有之候。矛盾撞着、何れと云ひ甲斐なき有様不憫と思召候らへ。(『全集』第一巻p254~255)

また、結核の病に倒れて、療養所の極端な不足を再認識させられる一方、「近時救世軍の結核療養所設置運動は益々緊張し来り例の獐猛なる態度を以て奮励せらるゝ

所は実に敬服の至りに候」と記して、仏教界の奮起を促し、「肺病」に加えて、「らい病」と「花柳病」を含めた「三大悪病」（いずれも劣悪な条件の下に置かれているという意味）への医療および社会教化策を三輪に対して問題提起している。三輪の四恩瓜生会における救療事業等を念頭に置いたものであろう。なお、三輪からは四恩瓜生会の機関誌『精華』が届けられている。

これまで見てきたように、長谷川にとって、三輪と中西は共に社会事業に使命感をたぎらせる無二の同志であった。手痛い闘病生活に身を置きながら、現実と理想のはざままで苦悩する胸中を吐露し、友情を育むことができたのは、長谷川の再出発のバネになったにちがいない。
(次号につづく)

令和元年度淑徳大学アーカイブズ特別展

「祈りのすがた—交流する生者と死者—」開催

今年度の淑徳大学アーカイブズ特別展は、10月18日（金）～11月30日（土）の会期で開催されました。近年「墓じまい」という言葉を耳にします。また、葬儀のあり方も多様化してきました。古来より日本人の死生観については、お盆の行事に見られるように「あの世」が遥か彼方の異次元の世界ではなく、「この世」の周辺にあって、生者と死者の間には頻繁な交流があったと考えられています。このような観念は科学知識の普及とともに消滅していくかのように思われていますが、決してそうではありません。

第1章「古代・中世の祈り」 魂は肉体に内在しており、それが離脱し帰ることができなくなった状態が人の「死」であり、どちらの世界にも属さない中間領域の存在がありました。古代から鎌倉時代まで庶民は風葬が一般的であったことも示しました。また、夜間から暁に行われていた葬送が、13世紀ごろから日中型の葬送が出現してきます。これは仏教の浸透によって、葬送を不吉なものとするより、死者を仏教的な仏として葬るといった意識が発生したことによると考えられます。

おおよそ平安時代後期を境として、この世と隔絶した遠い世界（浄土）の観念が拡大していきました。そこでは、墓地にとどまる死者はまだ救われない存在とされ、墓地での供養は死者の靈魂を確実にあの世に送り出すためのものと意識されました。

第2章「近世・近代の祈り」 「世俗化」が進行した近世では、「あの世」での救済よりも「この世」における生活の充実が求められるようになりました。近世初頭の庶民層における「家」の成立により、家産を守りながら世代を継いで同じ土地に暮らすという形が一般的となり、死者（先祖）は「家」を守る存在として、より身近なものとなります。死者は、生者である子孫や地域の人の恒常的な供養によって救われることになり、またそのことによって「家」や地域の安寧がもたらされることになったのです。

また、第2章では「生まれ変わり」の事例や「ムカサリ絵馬」「供養絵額」の奉納、「モリ供養」といった民俗事例、「オガミサマ」の活動など、具体的な事例からその様子を探りました。



第3章「現代の祈り」 わが国の伝統的な死生観は、1960年代の高度経済成長期以降大きく変化しました。それまで「家」や地域によって供養され、記憶されてきた、いわば「社会的」であった死者が、身近な家族や親族のみが葬儀に携わることによって、死者と生者の関係は「個人的」なものとなってきました。そして、このことにより死者への想いはむしろ強いものとなり、現在ではむしろ霊の存在やあの世の存在を肯定する傾向が強まっているといえます。

葬儀の形態も家族葬・樹木葬・散骨・直葬など多様化し、埋葬地も寺院から公園墓地へ、さらに他の場所へと拡大していますが、その中でも死者との対話が当たり前という日本人の意識が根強く残っていることを取り上げました。

本展では、亡くなった人に対して生きている人びとが

どのような想いをいだき、祈りを捧げてきたのか、その歴史的流れをみようとしたものです。「死」について考えることはそのまま「生」について考えることにほかなりません。本展示は、ご覧になられた方がそれぞれの「生」と「死」を考える上での一助になればと思ひ企画いたしました。おかげ様で大学の学生や教職員をはじめ、千葉県内はもとより他地域よりも多くの見学者を迎えることができました。ありがとうございました。

なお、展示の会期は終了いたしました。2020年3月15日(日)までは、お申込みいただければ開室いたします。ホーム・ページやE-mail、電話等にてアーカイブズ事務室までお申し込みください。

開室時間 10:00~16:00

会場 千葉キャンパス 淑水記念館(1号館)3階
「淑徳大学アーカイブズ特別展示室」

「淑徳大学アーカイブズ10年の写真展」開催

淑徳大学アーカイブズは2010年(平成22)に設置され、今年で10年目を迎えました。これまで大学および学園の貴重な資料の収集・保存や事務文書の移管、さらに毎年の展示の開催や叢書の刊行など多岐にわたる活動を行ってきました。そこで今回特別展示室の一部を利用し、当アーカイブズが発行した『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』の表紙を飾った、大学の足跡を示す写真をパネル展示した「淑徳大学アーカイブズ10年の写真展」を、特別展の開催に合わせて行いました。

千葉キャンパスの龍澤祭に合わせて開催された「ホー

ムカミング・デー」の際には、多くの卒業生が見学され、懐かしい話に花を咲かせていました。



淑徳大学アーカイブズ日誌 (2019年6月~11月)

- | | |
|-------|--|
| 6月1日 | 千葉・関東地域社会福祉史研究会2019年度第1回運営委員会出席(於墨田区西光寺)。〈桜井〉 |
| 6月1日 | 特別展示室臨時開室。 |
| 6月8日 | 特別展示室臨時開室。 |
| 6月11日 | マハヤナ学園創立100周年記念誌編集のため業者と打ち合わせ(於マハヤナ学園撫子園)。〈桜井〉 |
| 6月13日 | お茶の水女子大学大藪海助教と学生12名アーカイブズ特別展見学。 |
| 6月13日 | 第154回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催(参加者4名)。 |
| 6月18日 | 特別展示室臨時開室。 |
| 6月17日 | 管理栄養学部田代加代子教授他教員・学生125名学祖展・アーカイブズ特別展見学。 |
| 6月18日 | 特別展示室臨時開室。 |
| 6月19日 | マハヤナ学園創立100周年記念誌編集委員会出席(於大乘淑徳学園本部)。〈桜井・大寫〉 |
| 6月19日 | 学園本部より建学式配布資料寄贈。 |
| 6月20日 | 今年度の特別展の準備のため赤羽敬夫氏(府中市)訪問。〈桜井〉 |
| 6月21日 | 総合福祉学部江津和也准教授と大学院生3名アーカイブズ特別展見学。 |

6月22日	オープンキャンパスのため特別展示室臨時開室。
6月23日	第23回史料保存利用問題シンポジウム参加（於駒澤大学駒沢キャンパス）。〈大寫〉
6月23日・24日	今年度の特別展の準備のため千葉県文書館で資料調査。〈桜井〉
6月27日	福田会育児院関係資料解読作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
6月28日	第155回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
6月28日	今年度の特別展の準備のため日野市立郷土資料館で資料調査。〈桜井〉
6月29日	特別展示室臨時開室。
7月1日	マハヤナ学園創立100周年記念誌校正作業（於マハヤナ学園撫子園）。〈桜井〉
7月4日	全国大学史資料協議会東日本部会第183回幹事会（於立教大学池袋キャンパス）・第115回研究会（於平和祈念展示資料館）参加。〈桜井〉
7月8日	総合福祉学部「教育学概論A」（人文学部土井進教授）受講生80名学祖展・特別展見学。
7月12日	静岡県立短期大学非常勤講師佐々木光郎氏方面委員関係資料閲覧のため来室。
7月12日	第157回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
7月13日	千葉・関東地域社会福祉史研究会第14回（2019年度）研究総会出席（於東京キャンパス）。〈桜井・大寫〉
7月18日	大学改革室より資料寄贈。
7月19日	人文学部「博物館情報・メディア論」（森田喜久男教授）受講生28名学祖展・特別展・大巖寺宝物殿見学。
7月20日	今年度の特別展の準備のため千葉県文書館で資料撮影。〈桜井〉
7月26日	第156回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
7月26日	2019年度第4回福田会育児院史研究会出席（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
8月1日	今年度の特別展の準備のため東北大学の鈴木岩弓教授訪問。〈桜井〉
8月5日	大学の文書管理について埼玉キャンパス小野寺事務長と打ち合わせ（於埼玉キャンパス）。〈桜井〉
8月6日	今年度の特別展の準備のため国立歴史民俗博物館見学。〈桜井〉
8月8日	マハヤナ学園創立100周年記念誌編集のため業者と打ち合わせ（於マハヤナ学園撫子園）。〈桜井〉
8月10日	千葉大学檜皮瑞樹准教授のゼミ生7名アーカイブズ施設及び展示見学。
8月14日	高瀬真卿のご子孫丸山順子氏らと懇談。〈桜井〉
8月17日	今年度の特別展の準備のため葛飾区郷土と天文の博物館見学。〈桜井〉
8月17日	今年度の特別展の準備のため千葉県立中央図書館調査。〈桜井〉
8月20日	今年度の特別展の準備のため千葉県立中央図書館調査。〈桜井〉
8月22日・23日	今年度の特別展の準備のため山形県鶴岡市の「モリ供養」調査。〈桜井〉
8月27日	大巖寺研修参加者22名学祖展・アーカイブズ特別展見学。
8月28日	社会保険労務士安部敬太氏資料閲覧のため来室。
8月31日	今年度の特別展の準備のため千葉県文書館で資料調査・撮影。〈桜井〉
9月5日	マハヤナ学園創立100周年記念誌編集のため業者と打ち合わせ（於マハヤナ学園撫子園）。〈桜井〉
9月12日	今年度特別展の準備のためいすみ市立郷土資料館で資料撮影。〈大寫・桜井〉
9月13日	第157回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
9月23日～25日	岡田英己子氏資料閲覧のため来室。
9月26日	第184回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会出席（於立教大学池袋キャンパス）。〈桜井〉
9月27日	第158回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
9月30日	2019年度第1回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部理事長室）。〈大寫・桜井〉
10月4日	2019年度第6回福田会育児院史研究会出席（於福田会広フレンズ）。〈桜井〉
10月5日	千葉・関東地域社会福祉史研究会2019年度第2回運営委員会出席（於墨田区西光寺）。〈桜井〉
10月8日～10日	産業現場実習生3名受け入れ（市原特別支援特別学校つるまい風の丘分校）。
10月11日	第159回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
10月14日	今年度の特別展のためいすみ市郷土資料館から資料借用。〈大寫・桜井〉
10月17日	今年度の特別展のため千葉県文書館から資料借用。〈桜井〉
10月18日	アーカイブズ特別展「祈りのすがた—交流する生者と死者—」開催。
10月18日	萬葉学会役員特別展見学（8名）。
10月19日～20日	萬葉学会大会参加者48名特別展見学。
10月24日	福田会育児院関係資料解読作業（於福田会広尾フレンズ）。〈桜井〉
10月25日	第160回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。

10月25日	2019年度第7回福田会育児院史研究会出席（於福田会広フレンズ）。〈桜井〉
11月4日	淑徳大学アーカイブズ叢書『大念寺日鑑』第3巻校訂のため佐藤孝之氏と打ち合わせ。〈大寫〉
11月8日	第161回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
11月14日	大念寺にて日鑑の原本調査・撮影（於大念寺）。〈大寫〉
11月16日	第19回地域社会福祉史研究会連絡協議会研究交流会に出席（於東京キャンパス）。〈桜井〉
11月16日	淑徳大学コミュニティ政策学部開設10周年記念シンポジウム出席。〈大寫〉
11月18日	桜林高校教師・生徒21名学祖展とアーカイブズ特別展見学。
11月19日	総合福祉学部白井伊津子教授と学生45名アーカイブズ特別展見学。
11月19日	淑徳大学アーカイブズ叢書『大念寺日鑑』第3巻編集のため編集協力者石川達也氏と打ち合わせ。〈大寫〉
11月21日	大網高校教師・生徒26名学祖展とアーカイブズ特別展見学。
11月22日	第162回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催（参加者4名）。
11月29日	江戸崎総合高校教師・生徒44名学校見学として学祖展とアーカイブズ特別展見学。
11月30日	アーカイブズ特別展「祈りのすがた—交流する生者と死者—」終了。

「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内

— 参加者を募集しています —

淑徳大学アーカイブズでは、地域の方々との交流を深めるため、「古文書に親しむ会」を開催しています。当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学とともに、当アーカイブズ寄贈資料の整理などの実践作業も行っています。

会は毎月第2・第4金曜日の午前10時からお昼頃まで、淑水記念館で開催しています。初心者の方も大歓迎です。くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方は、どなたでも参加できます。ぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

〈問い合わせ・申し込み〉 淑徳大学アーカイブズ
TEL 043 (265) 7526 〈直通〉



淑徳大学アーカイブズでは、 大学及び大乗淑徳学園に関する資料の寄贈をお願いしています。

- 1 大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
- 2 学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記事・各種書類等。
- 3 学生時代に使用していたもの。
- 4 大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご相談下さい。



淑徳大学
アーカイブズ・ニュース 第20号
NEWSLETTER of
SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日：2020年（令和2）1月10日
編集・発行：淑徳大学アーカイブズ
〒260-8701 千葉県千葉市中央区大蔵寺町200
TEL 043-265-7526（直通）
e-mail：archives@soc.shukutoku.ac.jp